

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：33804

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12964

研究課題名(和文)介護予防を目的とした住民運営通いの場での地域作業療法学実践モデル構築と評価法開発

研究課題名(英文) Construction of a practice model and development of an evaluation method of the Occupational Therapy that Provides Support in a Community-Based Salon for Preventive Care

研究代表者

田島 明子 (Tajima, Akiko)

聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：80550243

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：地域包括ケア時代において地域作業療法に介護予防への関与が期待されている。厚生労働省は、介護予防の取り組みを見直し、一次予防事業と二次予防事業を区別しない住民運営の通いの場(以下、サロンとする)を増やし、地域リハビリテーション活動支援事業として、サロンへのリハビリテーション専門職の関与を促進するとして。そこで、住民運営の通いの場での作業療法の知識・技術を体系化し、役割を整理することを研究目的とした。研究の結果、1.サロンの企画・運営の支援、2.ボランティア養成講座の企画・講師、3.サロン実施の際のサポートと振り返りの助言、4.サロン参加者の評価と行政へのフィードバック、の4点の役割が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究代表者は作業療法士であるが、作業療法学では作業療法士による健康増進のための地域づくりの実践と理論の開発が求められている。本研究の成果により、高齢者同士の支え合いから多くの高齢者の生活の質の向上が期待できる住民運営の通いの場での作業療法の知識・技術を体系化したことで、地域リハビリテーション活動支援事業を推進していくうえでのモデルとなるだけでなく、地域作業療法学における実践と理論の開発の観点からも意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Community based occupational therapy is expected to be involved in long-term care prevention in community comprehensive care. The Ministry of Health, Labor and Welfare said that it will increase the number of salons for the elderly who do not distinguish between primary prevention and secondary prevention and promote the involvement of rehabilitation professionals in the salons for the elderly. Therefore, we aimed to systematize the knowledge and skills of community based occupational therapy in salons for the elderly and clarify their roles. As a result of the research, The occupational therapist had four roles in the salon: (1) to support planning and administration of the salon, (2) to plan and lecture at the volunteer training course, (3) to support the salon conduct and give advice on reflection, and (4) to evaluate participants who come to the salon and give feedback to the administrators.

研究分野：作業療法学、障害学

キーワード：地域作業療法 介護予防 住民運営の通いの場 作業療法士 間接的支援 作業科学

1. 研究開始当初の背景

地域包括ケア時代の地域作業療法で強化が期待されているものの一つに介護予防への関与がある。厚生労働省は、介護予防の取り組みを見直し、一次予防事業と二次予防事業を区別しない住民運営の通いの場（以下、サロンとする）を増やし、地域リハビリテーション活動支援事業として、住民運営の通いの場へのリハビリテーション専門職の関与を促進するとした。しかし、従来の地域作業療法学は、すでに障害を持っているものに対する個別臨床的な取り組みが主であり、障害を持つ以前の高齢者を対象にする、予防における、住民を間接支援するような取り組みについては、ごく一部の先駆例を除き記述的な報告すら乏しい。

介護予防政策の見直しの根拠の一つになったのが、愛知県武豊町での取り組みの一連の評価研究（以下、武豊プロジェクト）である。そこでは65歳以上の高齢者の11.3%が参加し、うつや認知症の改善傾向、参加者同士の健康情報の授受にも効果を示している。武豊プロジェクトにはリハビリテーション専門職である作業療法士も関与してきた。今後の研究課題として、先駆的な作業療法士の取り組みの内容を記述し、サロンでの作業療法の知識・技術を体系化し、果たすべき役割を整理し、地域作業療法学における介護予防への間接支援のあり方を体系化して、それを担える作業療法士を増やし、他地域への移植をしていくことが必要である。

2. 研究の目的

武豊プロジェクトにおけるサロン運営の要点は2点ある。1点めは地域在住高齢者によるボランティアと参加者の相互作用である。ボランティアは高齢者本人の意思さえあれば誰でも行える。またボランティアは参加者のサロンへの積極的な参加を促す役割を担う。2点めはアクティビティを介して参加者同士の相互作用を促す点である。つまり、介護予防機能を充実させるためのポイントは、虚弱な高齢者も巻き込んだより多くの高齢者にサロン参加を促すことであり、その方法論を明確化するために、これまで作業療法士が関与してきた、ボランティア養成、アクティビティ運用、虚弱な高齢者を含めた多くの高齢者が参加できる工夫から作業療法の知識・技術を体系化することを目的とした。

3. 研究の方法

【研究1】

本研究では、サロン立ち上げにボランティアとして関与したA氏への個別インタビュー調査とサロン研究やそれに類似する高齢者介護研究を実施してきた研究者4名へのフォーカス・グループ・インタビューの調査結果について、質的、帰納的分析から、サロン参加促進要因を抽出し、作業的観点や作業的存在として捉えた際のサロンの持つ意味から作業療法における間接的支援のための支援構造を考察することを目的とした。

Wilcockら、Caponをカテゴリ化したデータのテーマ化に際して参考にした。Wilcockらは、人を作業的存在として捉え、作業的存在としての成り立ちは、doing（すること）、being（あること）、belonging（所属すること）、becoming（なること）の4要素から説明している。人は、作業を行う（doing）ことで、所属を得る（belonging）などして、あるいはdoingそのものから、存在（being）を規定し、それが時間軸を進るとbecomingになるとする。Caponは、住民の作業的観点からの健康決定因子の視点として、People（人々）、Place（場）、Planet（地球環境）を掲げている。そこで、抽出されたサロン参加促進要因を、健康に関わる作業的観点や人を作業的存在として捉えた際の成り立ちから分節化し、作業療法士の間接的支援の支援構造を検討した。

【研究2】

本研究では、介護予防を目的としたサロンでの地域作業療法学実践モデル構築に向けて、本プロジェクトを主導してきたリハビリテーション専門医であるA氏、サロンのボランティア養成講座の講師を担当してきた作業療法士B氏への個別インタビューをもとに、介護予防を目的としたサロンで間接的支援を行う作業療法士の役割について明確化することを目的とした。

A氏のインタビュー結果については、サロン全体の取り組みについての内容はグリーンらにより開発されたヘルスプロモーション活動展開のためのモデルであり、診断・計画に関わるPrecedeと実施・評価に関わるProceedから成る、Precede-Proceedモデルに当てはめた。作業療法士の取り組みについては、逐語録の内容に沿って図式化を行った。B氏のインタビュー結果についてはボランティア養成講座についての基本情報と、間接的支援のための視点に分節化し、分析した。

4. 研究成果

【研究1】

「peopleに関わる要因」「placeに関わる要因」に分類された。まず「peopleに関わる要因」の確認をする。カテゴリは【】で、サブカテゴリを<>で示した。

作業的存在としての belonging と doing の 2 点のテーマ設定を行った。大カテゴリは【】、中カテゴリは「」、小カテゴリは<>で示した。

まず belonging として、【行政の施策との連動】【行政や研究者、作業療法士のボランティアへのバックアップ】が含まれた。サロン参加者のヘルスプロモーションへの集団志向性を高める大きな要因になっていると捉えられた。【行政や研究者、作業療法士のボランティアへのバックアップ】は、サロン運営の要であるボランティアのバックアップは重要課題だが、行政が財政的なバックアップをし、研究者がサロンの効果を参加者に提示しているため、ボランティアの意欲が高まり参加を得られているとの内容であった。

doing に関してみると、【参加・継続】として、「呼び込む」「つなぐ」「受け継ぐ」「男性参加者への配慮」が分類された。さらに「呼び込む」には<ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に与える影響>、<役員などの権威の力がボランティア参加に与える影響>、「つなぐ」には<グループ化と排他性>、「受け継ぐ」には<代替わり・新陳代謝をする>が含まれた。

<ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に与える影響>は、ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に影響するとの内容であり、<役員などの権威の力がボランティア参加に与える影響>は、各地区の役員の人脈によってボランティア参加を募ったりするため、サロンによっては男性ボランティアが多いといった状況が生じるとの内容であった。<グループ化と排他性>は、参加者の仲良しグループ化がかえって参加しづらい人を生じさせることもあるとの内容であり、<代替わり・新陳代謝をする>は、若い年代にボランティア役割を担ってもらうことが課題であり今後は運営方法に工夫を要するとの内容であった。「男性参加者への配慮」には、<男性参加者（団塊世代）の増加>、<性別による行動の違い>が含まれた。<男性参加者（団塊世代）の増加>は、団塊世代が定年退職をし、地域活動への参加者が増加しているとの内容であり、<性別による行動の違い>は、女性はグループ化しやすく、男性は一人で行動することを厭わない様子が観察されやすいとの内容であった。

【独自性と魅力あるサロン運営】には、<各地区の運営の独自性>、<自由度のあるメニュー作成>、<参加者それぞれの参加目的>、<楽しい雰囲気づくり>、「既存のコミュニティーグループとの関係」が含まれた。<各地区の運営の独自性>は、ボランティアと参加者の関係はサロンによって様々であり、参加者の年齢層によっては参加者がボランティア役割を担うサロンもあるなど、各サロンの運営には独自性があるとの内容であり、<自由度のあるメニュー作成>は、各サロンのボランティアがメニューを作成しているため、個性的なメニュー内容になっているとの内容であった。<参加者それぞれの参加目的>は、参加者はそれぞれ楽しみや健康づくりなどの参加目的を持ち、主体的に参加をしているとの内容であり、また<楽しいサロンの雰囲気>は、各サロンとも楽しく、笑いがあり、おしゃべりのできる雰囲気であるとの内容であった。「既存のコミュニティーグループとの関係」には、<出前ボランティア>、<芸能祭>、<老人クラブ>、<厄年の会>が含まれた。<出前ボランティア>は、サロンにてフラダンスなどを出前で行う地域サークルであるが、サロンが出演場所を支援しているとの内容であった。<芸能祭>は、武豊町に年に一度ある趣味活動の発表場所である。芸能祭への参加者がサロンにて趣味活動の発表を行うこともあり、気軽に楽しめる場になっているとの内容であった。<老人クラブ>は、各地区にあるが、活動内容が重複すると競合するため、そうならないよう活動内容を工夫し、参加者にとっては選択機会となるような配慮が重要であるとの内容であった。<厄年の会>は、武豊町に住む男性が厄年である 42 歳になると作るグループであり、その後集まりが継続していく。地域のつながりを作る重要な機会となっているとの内容であった。

次に「place に関わる要因」には、【行政の施策との連動】【地域特性への配慮】【通いやすさ】が含まれた。

【行政の施策との連動】は、サロンが第 5 次武豊町総合計画・後期戦略プランのなかの福祉のまちづくりの事業に位置づいていたため、それが推進力となったとの内容であった。

【地域特性への配慮】は、新興住宅地に居住する人は他地区に以前から居住する人と比較し、人とつながろうとする意識が強いとの内容であった。【通いやすさ】は、<駐車場の有無の影響>、<会場の利便性の影響>が含まれた。<駐車場の有無の影響>は、駐車場の有無は外出先の制限につながったり、遠くのサロンへの参加が可能になったりもするとの内容であった。<会場の利便性の影響>は、サロン会場には利便性の良い場、悪い場とあり、利便性により参加が制限されるとの内容であった。

以上より、人を作業的存在として捉えたとき、サロンは、健康志向性を持った、高齢者の誰をも受け入れる belonging を用意し、ソーシャル・キャピタルを育成する doing を提供している place であるとまとめることができた。

【研究 2】

1) サロン全体の取り組み

A 氏からサロンの取り組みの全体像と、作業療法士の関与の状況について聴取した内容を Precede-Proceed モデルに当てはめた。

本サロンでは診断・計画 (Precede) として「全国的にみて地域在住高齢者の介護予防事業のハイリスクアプローチが十分に機能していない」「ポピュレーションアプローチを行い、ハイリ

スク者も含めた地域在住高齢者の健康増進をする参加の場が少ない」といった診断をしたうえで、そうした課題を「研究者と武豊町で共有化」し、「実現のための人的・環境的資源を開発」することにより、「サロン参加者、行政にとって介護予防に役立つ」事業が計画された。この診断・計画の過程に作業療法士も関与している。

また実施・評価(Proceed)として、作業療法士は、住民対象の講演会の実施、ボランティア養成講座の実施、住民主体のサロンの実施を行う。行政職員はサロンに参加し、実施状況を把握するだけでなく、サロンの企画・運営に関わる定期的な会議を開催し、それに研究者、作業療法士が参加し、情報共有や今後の展開について検討を行ったりしている。評価については、作業療法士は、年に1度、「お元気チェック」(生活機能や心理社会面に関するアンケートと、認知機能や体力の調査)を用い、サロン参加者の心身機能や主観的健康感の変化を把握している。このように作業療法士は、サロン全体の取り組みのほぼすべてに関与している。特にボランティア養成講座では講師を行い、地域在住高齢者のヘルスプロモーションを促進する間接的支援や「お元気チェック」を行っている。

作業療法士の役割を抽出し図式化したものが図1である。作業療法士は、行政と共同して地域診断を行い、サロン開催の企画に関与する一方で、サロンへのボランティア参加を希望する地域在住高齢者に対してボランティア養成講座の企画・開催をする。そして、サロン開催当日は、ボランティアの活動のサポートを行い、実施後、ボランティアの行う振り返りの時間のなかで、肯定的フィードバックや助言を行う。また、サロン参加者の健康状況の評価項目を選定し、年に1度評価を実施し、行政に対してその結果をフィードバックすることを通して、根拠に基づいたサロン実施の改善をするという円環を描いた間接的支援を行っていることを示している。

2) ボランティア養成講座

ボランティア養成講座は、サロン開所当初年度より行っており、2017年度で10年目になる。年度内に5日間連続研修を1セットのみ行っており、受講者は5日間すべて受講可能であることが条件になっている。本講座に参加しなくてもサロンへボランティア参加は可能であり、すでにボランティア参加している地域在住高齢者が受講をすることも多い。2名の作業療法士が5日間の内容を分担して講師を行っている。1、2回目は座学である。それを基に3回目には演習を行うなかでボランティアの役割を知ってもらい、4、5回目にはプログラムを立案し、実際のサロン会場でそれを行い、作業療法士がフィードバックを行うという内容になっている。本研究のインタビュー対象者は2、3回目を担当しているが、研修内容立案時にもう1名の作業療法士と話し合いを行ったり、研修実施の際には相互に連絡を取り合い、内容の確認をし合ったりしている。

3) 作業療法士の間接的支援の視点

作業療法士は、地域在住高齢者の多くが主体的にサロン参加をするための支援を工夫する。そのための間接的支援の視点を、作業療法士B氏のインタビュー結果から明らかにしたものが表3である。

インタビュー結果から33のカードが生成され、内容の類似性・差異性から整理・分類したところ15のコード、6つのサブカテゴリが生成され、最終的に4つのカテゴリが生成された。コード名後の()内の数字はカード数である。カテゴリを【】、サブカテゴリを<>、コードを「」、逐語録内容は『』とし、結果を説明する。

【サロン継続の課題】には、「サロンプログラムのマンネリ化」「サロン参加者が増えにくい」が含まれたが、どちらもボランティア養成講座参加者から講師が相談を受けた内容であった。

【ボランティア活動への動機づけ】には、「武豊町憩いのサロンのボランティアとしての役割を伝える」「ボランティアは認知症予防になると伝える」「ボランティアにとって実感できわかりやすい内容にする」「サロン参加・継続のための工夫点を話す」が含まれた。「武豊町憩いのサロンのボランティアとしての役割を伝える」は、サロンの趣旨やボランティア活動の目的を伝えるといった内容であった。「ボランティアにとって実感できてわかりやすい内容にする」は、『回想法の内容にしても、対象者にあわせて、年齢層をちょっと下げた』り、『専門性の高いものをやると、それはできるようになるんですけど、汎用性がないというか、他のものにつなげにくくなってしまっているので、そここの辺の取り扱う内容のバランス感覚(が必要:筆者追記)』といった逐語録内容を含めた。「サロン参加者増加・継続のための工夫点を話す」は、『どこに網を投げるかより、1発目に、こけないようにするための工夫をお話ししている』といった逐語録内容を含めた。

【参加者】は、<新規参加者が継続参加するための工夫>と<サロン活動の良い側面の周知>が含まれ、前者については、「役割を持ってもらう」「話しを聞いてもらえた・所属できた感覚を持ってもらう」「ストレスを感じないような配慮をして自分のことを話してもらい、なじみの関係を作る」といったコードが含まれた。どれも新規参加者がサロンにまた来たいと思ってもらえる工夫の仕方として語られていた。後者については、サロンにまだ参加していない人を新規参加者にするための工夫として語られていた。

【プログラム】は、<集団の特性を知り、活かす>と<作業活動の活かし方を伝える>が含まれた。前者については「課題をクリアすることに集団組織は結束する」「成熟集団は新しい参加

者が入りづらい」が含まれた。「課題をクリアすることに集団組織は結束する」は、『集団というのは、課題を解決することに、組織が強くなる』『ボランティアさんもそうなんですよ』といった逐語録内容であった。「成熟集団は新しい参加者が入りづらい」は、『集団というのはクロードにすればするほどストレスが高い。成熟集団を目指しがちですけど、たぶん新しい人は来ない、だから配慮が必要である』といった逐語録内容を含めた。後者については、「共感しあえる作業活動をする」「性別差に配慮した役割を提案する」「1つの作業から波及的に別の作業を展開する」が含まれたが、「共感しあえる作業活動をする」は、『同じおやつの中でも、ただ食べる、腹が満たされるではなくて、懐かしい、ちょっと面白かったなであるとか、おやつを食べるにしても、みんなの共有の話題にできると、ここで食べるおやつは格段においしいという印象ができる』といった逐語録内容を含めた。「性別差に配慮した役割を提案する」は、『男性には明確な役割を、例えば椅子とか机を並べるのに、どうしても男手が欲しい』など、性別の違いでどのような役割を提供するとよいかといった逐語録内容を含めた。「1つの作業から波及的に別の作業を展開する」は、『小学校の頃、たぶん作ったことがあるだろうなというようなもの、5月なら、新聞紙で昔作ったようなかぶとをみんなで作る。ただそれだけだとクオリティーにどうかと思ったら、昔作ったことのあるものにプラスして、何か飾りを、格好いいものとか、かわいいものを付けるのもいいと思う。作って終わりだともったいない。写真を撮るとか、作ったものに対して1人や2人でいいので、「格好よかったね」と言い合い、賞にする。』といった逐語録内容を含めた。インタビュー対象者はこうした工夫を『作業療法士的である』と表現していた。

【研究1】において、サロン参加促進要因として、サロンの場を健康志向意識の高まりに支えられたヘルスプロモーションの場として位置づけ、その認識を広げる、サロンの場を基点として人と人をつなぐ、独自性と魅力あるサロン運営の3点があがっていた。B氏の間接的支援の視点もまさにその3点であり、～の実現のための実践方法について、作業療法士はボランティア養成講座を通して地域在住高齢者に情報伝達をし、地域在住高齢者のこれら3点の意識を高める働きかけを行うなかで、サロンを基点とした地域在住高齢者のヘルスプロモーションを間接的支援していると考察された。

【研究2】において、介護予防を目的としたサロンでの作業療法の役割として、以下の4点があることが確認された。

1. サロンの企画・運営の支援
2. ボランティア養成講座の企画・講師
3. サロン実施の際のサポートと振り返りの助言
4. サロン参加者の評価と行政へのフィードバック

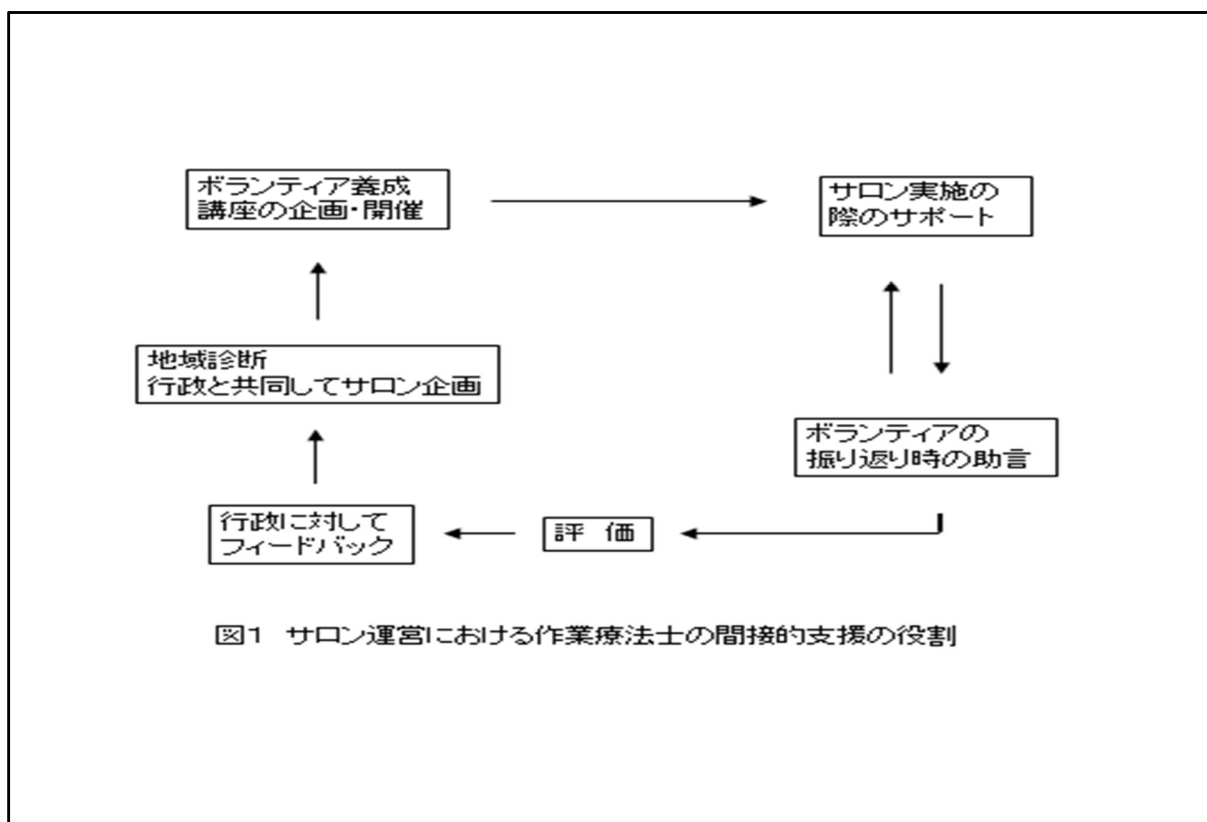


図1 サロン運営における作業療法士の間接的支援の役割

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田島明子、いとうたけひこ	4. 巻 11
2. 論文標題 介護予防においてソーシャルキャピタルを活用した研究に関連する文献のレビュー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 聖隷社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 64 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田島明子	4. 巻 52 10
2. 論文標題 海外事情 スコットランドにおける人権ベースの認知症の人への作業療法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作業療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1068 1070
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田島明子、慶徳民夫、いとうたけひこ	4. 巻 24
2. 論文標題 地域作業療法学を受講したにも関わらず地域作業療法に関わりたいたいと思わなかった理由 質問氏調査結果のテキストマイニング分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 リハビリテーション教育研究	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田島明子、近藤克則、慶徳民夫、幸信歩	4. 巻 15
2. 論文標題 ヘルスプロモーションを目指した介護予防における作業療法士の間接的支援の支援構造-住民運営通いの場への参加促進要因についての作業科学の視点からの一考察-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 リハビリテーション科学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田島明子、池田保、増田雄亮	4. 巻 53 (10)
2. 論文標題 海外事情 スコットランドにおける「認知症の人に対する人権ベースのリハビリテーション政策づくり」に関わるOTの活躍	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作業療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1097-1099
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島明子、近藤克則	4. 巻 14
2. 論文標題 介護予防を目的とした住民運営の通いの場で支援を行う作業療法士の役割	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 リハビリテーション科学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 47-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田島明子、谷口起代、西野由希子
2. 発表標題 「当事者の生きやすさを追求する共にある場」をつくる作業的要素 わっぱの会と当事者研究会の取り組みの比較検討からの一考察 -
3. 学会等名 障害学会第15回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 介護予防を目的とした住民運営通いの場での地域作業療法実践モデル構築と評価法開発
3. 学会等名 混合研究法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 慶徳民夫、丹野克子、大川陽平、田島明子
2. 発表標題 地域作業療法に対する在学中の関心の有無の要因と卒業後の意識との関係 山形県における調査から
3. 学会等名 教育研究大会・教員研修会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田島明子、慶徳民夫
2. 発表標題 「武豊町憩いのサロン」の参加促進要因の探索的研究 - 当事者・有識者である対象者へのインタビュー調査結果からの一考察 -
3. 学会等名 第51回日本作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 介護予防においてソーシャルキャピタルを活用した研究に関連する文献のレビュー
3. 学会等名 2018年度 看護・社会福祉・リハビリテーション合同研究発表会および教育改革推進経費採択テーマの発表会(学内)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 地域在住高齢者のヘルスプロモーションを目的とした住民運営通いの場における作業療法士の間接的支援 - 武豊町憩いのサロンのボランティア養成にかかわる作業療法士へのインタビュー調査結果からの一考察 -
3. 学会等名 福祉のまちづくり学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 作業は人を元気にする！地域に広げよう、人の輪、作業の輪 - 地域で展開する高齢者の介護予防 -
3. 学会等名 ミニ国際シンポジウム(学内) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 作業は人を元気にする！地域に広げよう、人の輪、作業の輪～その人を中心においた支援～
3. 学会等名 やまくち作業療法フェスタ (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 「武豊町憩いのサロン」の参加促進要因の探索的研究～当事者・有識者である対象者へのインタビュー調査結果からの一考察～
3. 学会等名 第51回日本作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 介護予防においてソーシャルキャピタルを活用した研究に関連する文献のレビュー
3. 学会等名 第53回日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島明子
2. 発表標題 スコットランドにおける人権ベースの認知症の人への作業療法
3. 学会等名 日本認知症ケア学会東海ブロック大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田島明子、慶徳民夫、いとうたけひこ
2. 発表標題 地域作業療法学を受講したにも関わらず地域作業療法に関わりたと思わなかった理由 - 質問紙調査結果のテキストマイニング分析 -
3. 学会等名 全国リハビリテーション学校協会第30回教育研究大会・教員研修会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>教育学術データベース http://gyosekiweb.seirei.ac.jp:8081/scuhp/KgApp?kyoinId=ymdggooiggy</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	慶徳 民夫 (Tamio Keitoku) (00448622)	医療創生大学・健康医療科学部・講師 (31603)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携 研究者	近藤 克則 (Katsunori Kondo) (20298558)	千葉大学予防医学センター・社会予防医学研究部門・教授 (12501)	